

地域の文化や伝統を生かした子どもたちの主体的な遊び

— 保育者の環境構成に着目して —

Independently Invented Children's Games Reflecting Local Culture and Traditions
— Focusing of the Environmental Conditions for Preschool Teachers —

徳田 多佳子*
Takako TOKUTA

織壁 佐和子**
Sawako ORIKABE

大野 康子**
Yasuko ONO

齊藤 花奈**
Kana SAITO

小倉 宏樹*
Hiroki OGURA

請川 滋大***
Shigehiro UKEGAWA

要約 2017年に告示された幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領の領域「環境」には、新しく「日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ」の内容が加わった。しかし、先行研究の調査でこの項目を実施している園は少ない。そこで本研究は、地域ならではの文化や伝統行事をきっかけに、子どもたちから始まった遊びとそこでの保育者の環境構成を調査し、今後計画、立案する際の示唆を試みた。4例中3例は、いずれも子どもの思いを保育者がどのように援助するかが考えられていた。もう1例は、園で文化や伝統に触れる機会がつけられていた。子どもたちが地域の文化・伝統を遊びで再現したり、用意された環境を積極的に親しんだりする活動が、さらなる遊びへと大いに発展するためには、保育者が文化や伝統を一方的に伝えるのではなく、子どもの気持ちにしっかり応える援助と環境構成が必要であることが示された。

キーワード：領域「環境」、文化、伝統、主体的な遊び、環境構成

Abstract "Becoming familiar with the culture and various traditions of Japan and the local community in our everyday lives" was added to the Environment section of the Course of Study for Kindergarten, the Childcare Guidelines for Day Care Centers, and the Course of Study for Centers of Early Childhood Education and Care published in 2017. According to a previous study, however, few facilities implemented that item. Therefore, the current study examined games invented by children inspired by regional cultures and traditional events as well as environmental conditions for caregivers. This study attempted to gain insight into devising and planning those games in the future. In 3 of 4 cases, the preschool teacher sought to foster children's ideas; in the remaining case, opportunities were created for children to be exposed to culture and traditions. In order for children to develop culture and traditions into games, preschool teachers should not inculcate the children but respond to their feelings of them and they need to create relevant environmental conditions.

Key words : Environment, Culture, Traditions,
Independently invented children's games,
Environmental conditions

* 学術研究員
Academic Research Fellow

** 家政学研究科児童学専攻
Graduate School of Home Economics,
Division of Child Studies

*** 児童学科
Department Child Studies

1. 問題と目的 (徳田)

2017年に改訂(定)された幼稚園教育要領、保育所保育指針、及び幼保連携型認定こども園教育・保育要領(以下、3法令)の領域「環境」には、新しく「日常生活の中で、我が国や地域社会における様々な文化や伝統に親しむ」^{12,3)}ことが内容に盛り込まれている。しかし山崎ら(2020)が行った現職保育者に対するアンケートの意識調査によると、本内容の取組みに関して「頻繁に実践」と「実践することが多い」を合わせた値は41.7%であり、半数以上の幼稚園や保育所等の保育施設では、伝統や文化を取り入れた取組みが行われていない状況にある⁴⁾。

まず「文化」と「伝統」について、定義から確認する。大辞林をWebで検索すると、「文化」とは「①社会を構成する人々によって習得・共有・伝達される行動様式ないし生活様式の総体。言語・習俗・道徳・宗教、種々の制度などはその具体例。文化相対主義においては、それぞれの人間集団は個別の文化をもち、個別文化はそれぞれ独自の価値をもっており、その間に高低・優劣の差はないとされる。カルチャー。②学問・芸術・宗教・道徳など、主として精神的活動から生み出されたもの。③世の中が開け進み、生活が快適で便利になること。文明開化。④他の語の上に付いて、ハイカラ・便利・新式などの意を表す」とされている⁵⁾。領域「環境」に示された内容の取扱いでは、「文化や伝統に親しむ際には、正月や節句など我が国の伝統的な行事、国歌、唱歌、わらべうたや我が国の伝統的な遊びに親しんだり、異なる文化に触れる活動に親しんだりすることを通じて、社会とのつながりの意識や国際理解の意識の芽生えなどが養われるようにすること」^{6,7,8)}とあり、そのため本論文では、「文化」とは主として①の意味で使用する。また「伝統」を調べると、「ある集団・社会において、歴史的に形成・蓄積され、世代をこえて受け継がれた精神的・文化的遺産や慣習」とある⁹⁾。両者において社会によって形成されるものであることが共通しており、保育において「社会」を学ぶことが求められていると分かる。

「社会」の学び方として地域社会と連携した保育があるが、田口(2017)は学校や幼稚園・保育所と地域の関係性は、時代とともに変化していることを述べている¹⁰⁾。その言説によると、戦後の昭和期においては学校や幼稚園・保育所は、地域と密接に関わ

り強い連帯意識をもとにして、地域に支えられながらその役割を果たしてきた。その後時代が進むに連れて、連帯意識の希薄化や子どもの遊びも伝統的な遊びから近代的な遊びへと移り変わっていく中で、学校や園に求められる役割が変わってきていると指摘する。つまり、今までは家庭や地域で伝えていたような文化や伝統も、保育施設でふれる機会をつくる必要性が出てきており、このような背景からも、今回の改訂(定)で文化や伝統についての学びが新しい役割として加えられていると考えられる。

地域社会との連携という観点では、「文化」、「伝統」を継承していく役割を幼稚園や保育所が担っているとする先行研究もある。松崎(2016)は「地域社会への貢献という意識は、園や保育者にはこれまでのところ明確化されていない」という現状において、地域社会の文化の例として長野県飯田市の人形劇フェスタを取り上げ、飯田市内の全幼稚園・保育所での人形劇活動および人形劇フェスタへの意識や取組みの実態把握に関する調査や保護者の人形劇観劇の経験、意識、参加の実態、地域活動への関心や参加の実態に関する調査を実施した¹¹⁾。その結果として、園での子どもたちへの人形劇文化の伝承が、家庭・保護者の行動にまで影響を及ぼしていることを報告している。このように、園で行う文化の伝承が、世代を超えて地域の文化に受け継がれていくという仕組みの一端を担っていると考えられる。また恒岡(2015)は、民俗学の観点から考察を行い、園には地域の文化や伝統だけでなく、正月や七夕など日本の年中行事についても継承する役割があると述べている¹²⁾。今までは家庭や地域社会によって継承されてきた文化が、そのままでは継承されない危険性が増していると捉えることができ、幼稚園や保育所において文化を取り入れた活動の必要性が伺える。

領域「環境」、内容の取扱いに書かれている「社会との繋がり意識」は上述したような地域社会や家庭と連携する中で、文化や伝統を継承する役割の観点が大きいのではないかと思われる。一方で「国際理解の意識の芽生え」について、文化や伝統を取り入れる必要性はどのように考えることができるだろうか。安藤ら(2016)は、グローバル対応力の中核を日本人としてのアイデンティティであるとし、そのためには文化・伝統を学び日本文化に対して深く理解する必要があるとしている¹³⁾。ここでいうグローバル対応力には「異なる文化を理解、尊重、協

調していく態度や資質」が含まれており、3法令に示されている「国際理解の意識」と共通すると考えられる。安藤らの研究は小、中、高等学校に対しての文化・伝統教育を題材としているが、これは幼児教育でも同様に考えることができるだろう。一方で「幼稚園教育要領解説」にもあるように、国際化の進展から海外から帰国した幼児や外国人幼児、外国につながる幼児が在園することもある¹⁴⁾。安藤らは日本人としてのアイデンティティを教育することに主眼を置いているが、様々な背景をもつ幼児への教育的な取組みは、お互いを認め合い、受け入れる保育者の姿勢が重要であろう。

このように、文化や伝統を幼児教育へ取り入れることのメリットは大きい。他にも佐久本(2017)は沖縄の伝統工芸や民芸が保育現場に取り入れられている事例を紹介しており、その調査によると、沖縄を代表する伝統行事であるムーチャー作りや、お盆の際に踊るエイサーを取り入れている園の割合は97.2%と、非常に高い値を示している¹⁵⁾。しかしながら、沖縄の植物を用いた昔ながらの玩具作りを行う園は10%前後であり、前述の行事を取り入れている割合と比較して低い値となっている。これは山崎ら(2020)の調査でもあるように、担当の幼児の年齢が低く、工芸を行うのに十分な技術力がないことも考えられる。しかし佐久本は理由として、実際にそれらの伝統工芸を体験したことのない保育者も多いことに注目している。このような後者の課題については、川崎ら(2018)も「今の若い世代は自らの生活体験として伝統行事にあまり馴染んでこなかったであろうし、伝統行事についての知識も持ち合わせていない」と指摘している¹⁶⁾。しかしながら、今まではそのような教育の重要性はあまり意識されてこなかったとも述べている。依然として文化や伝統を取り入れた活動が保育現場で行われることは多くないため、今後保育者も子どもたちと一緒に地域の文化

や伝統を調べたり、学ぼうとしたりする姿勢が必要になるであろう。

そこで本研究は、地域の文化的な活動や伝統行事を生かしながら子どもたちが主体的に取り組んだ実践を調査し、その活動を支えている保育者の環境構成について考察する。それにより、こうした活動をまだ導入できていない園への計画、立案の示唆となることを目的とする。

2. 調査について (徳田)

2-1. 協力園の選定

筆者らがこれまで参加してきた公開保育や教育実習の巡回で訪れた園、自身の勤務園等で知り得た内容から、その地域ならではの文化や伝統にちなんだ行事を取り入れ、それをきっかけに園児の主体的な遊びが見られた実践を探した。その中から調査協力の得られた4園にインタビューを行った。

2-2. インタビューの概要

聞き取り担当者の居住地と調査園が近い場合は、直接訪問した。遠方の園には Web 会議ツールである Zoom を用い、2022年6~8月にインタビューを行った。所要時間は50~100分である。インタビュー項目は、①対象の活動が始まった経緯、②その後の展開と終わり方、③園として文化や伝統に触れるように意識しているか、またそれらは領域「環境」ねらい及び内容(6)をどれくらい意識した実践か、④園で考える文化と伝統とはどこまでのことを指しているかの4点として、これらの項目を自由に回答してもらった。各園の概要を Table 1 に示す。

2-3. 倫理的配慮

協力園には研究目的を説明し、了承のもとインタビューを行った。本文ではアルファベット表記にして個人が特定されるなどの不利益が生じることのないように示し、論文化の同意を得た。

Table 1 Overview of the facilities participating in this survey

	1園	2園	3園	4園
所在地	宮城県仙台市	新潟県出雲崎町	東京都中央区	沖縄県読谷村
施設名(種別)	認定向山こども園 (幼保連携型認定こども園)	出雲崎こども園 (幼保連携型認定こども園)	中央区立京橋朝海幼稚園(幼稚園)	よみたん自然学校 (認可外保育施設)
回答者	年長組学年主任	園長	園長	副校長
所要時間	50分	100分	65分	60分
活動時の学年	年長	年長	年少~年長	年少~年中
地域の文化・伝統の内容	すずめ踊り	獅子舞	蚕の飼育	エイサー

3. 各園の実践例 (齊藤, 大野, 織壁, 小倉)

ここで各園の実践を述べる。なお掲載した画像は、全て園から提供されたものである。

1. 認定向山こども園 すずめ踊りから (齊藤)

年長 5~6月

市内中心部で行われた青葉祭りの翌日、数人の年長児がうちわを持って登園した。保育者が理由を聞くと、



祭りですずめ踊りを見た際に配られたらしく、これを使って自分たちもすずめ踊りをやってみたいという。祭りには行っていないが興味をもった子どももいたため、保育者は動画でこの踊りの衣装やメイク、曲などを紹介した。するとそれに合わせて女兒 5, 6 人が身体を動かし楽しんだ。その日のカンファレンスで保育者は、子どもの様々な興味を拾えるよう、楽器やメイクのための顔ペン、衣装を作るための古着、扇形に切った画用紙などを用意することにした。翌日クラスの 10 人以上が集まり、興味をもったコーナーで思い思いに楽しんだ。途中で「園庭のステージで踊りたい」との声があがり、2 日目以降はお互いにメイクをし合い、自作のうちわやはちまきを使ったステージでのすずめ踊りが始まった。しばらくして、その中の 1 人が「すずめ踊りってステージでも踊ってるけど、歩きながら踊ってるよね」と気づき、数人で園庭の森の中を歩きながら踊ったり楽器を叩いたりして楽しむようになった。

1 週間ほどこの遊びは続いたが、徐々に参加するメンバーが減っていった。そこで保育者たちは再度検討し、目的があると子どもがより楽しめるのではないかと考えた。踊りを 1・2 歳児に披露することに決め、やりたいと言う子どもたちと一緒に具体的な内容考えた。祭りのすずめ踊りでは、団体ごとに名前が付いていたことを思い出した子どもの発言から、皆で考えた隊名で初めに自己紹介することにした。時には誰が先生役をするかでいざこざが起き、2, 3 人が抜けてしまうこともあった。保育者はその間あえて口出しはせずに待ち、最終的には「やはり参加したい」という

思いから子どもが自主的に遊びへと戻ってきた。発表の日は 1・2 歳の前で踊りを披露し、大成功を収めた。その後は満足して遊びきったためか、「次はメイク屋さんがやりたい」と遊びが展開していった。メイク屋さんの遊びは数日続き、人数も増える中で「またステージをやりたい」との意見が挙がり、メイクをして J-POP の曲をかけ、ステージで踊る遊びへと発展していった。

【活動の背景】

「すずめ踊り」は例年 5 月に行われる青葉祭りなどで披露される踊りである。鼻筋に白い線を描く化粧をし、揃いの法被で両手には扇子を持つ。笛や太鼓の囃子に合わせ、雀が餌をついばみ跳ねるような動きが特徴の踊りをしながら、列をなして練り歩く。新型コロナウイルス感染症の影響で祭りが数年ぶりに開催されたこともあるのか、すずめ踊りが遊びに取り入れられ、ここまで盛り上がったのは今年が初めてだと学年主任は振り返る。向山こども園の預かり保育では「地域に帰ったような時間を過ごしてほしい」との思いから、地域の文化に触れることへの意識があった。しかし日中の保育にそこまでの意識はなく、ここ数年の課題だったという。地域の文化や伝統を知ることの重要性を学び、保育者が勉強していたところであり、このすずめ踊りの活動をきっかけにより意識していきたいとの抱負も語った。

【考察】

遊びを深めていく中で、すずめ踊りのメイクをしてステージで踊るという活動は、子どもからの発信で新たな遊びへと展開している。すずめ踊りの遊びが楽しいものとして印象づいたからであろう。「すずめ踊りをして楽しかった」という思いが子どもたちの中に残れば、来年以降も祭りに興味をもち、地域への親しみや理解を深めることにつながるかもしれない。そのように子どもの活動が楽しく充実したものになるには、保育者同士がよく話し合い、環境構成することが重要だと本事例から分かる。さらに保育者主導ではなく子どもの意見を尊重して活動に取り入れ、いざこざがあっても遊びたい思いがあれば自分から戻ってくるだろうと見守る姿勢でいることで、子どもたちが意欲的に自分たちなりのすずめ踊りを作り上げている。また年長児が 1・2 歳児に踊りを披露する機会を設けることで、未満児が地域の文化・伝

統に触れる契機にもなっていると考えられる。

インタビューでは今後の課題として、保育者の地域の文化・伝統への意識のもち方が挙げられていた。地域の文化・伝統についての話が上げれば遊びに活かそうと思うものの、実際の活用が少ないのは保育者の意識に原因があるのではないかとのこと。そこで年長組では一昨年から家庭と連携し、休日に地域で出会ったものや新聞記事を子どもにも園で紹介してもらう取組みを始めた。また本事例では子どもたちの興味がすずめ踊りの由来以上に、メイクや扇子(ここではうちわ)に向いていたためその方向で活動が進んだが、文化・伝統の由来を伝えることを大切にしているとも話した。保育者が子どもからの発信に応えるには、地域の文化・伝統、そしてその由来等を知ろうと意識を広げることも必要だろう。

2.出雲崎こども園 獅子舞から (大野)

年長 通年



4月、5歳児クラスに進級した男児が園にあったメロンの空き箱を見つけた。蓋の片方だけが開く様子が獅子の口のように言い出し、この活動が始まった。J児たち数名が興味をもち、自分たちなりの獅子作りを始めた。自分たちのイメージしている獅子舞について話し合うなかで、獅子の耳の形がどのようになっているのか疑問が湧いていく。その後、年長児皆で地域の資料館を訪れ、獅子舞に使われる本物の獅子を見学した。これにより耳以外の歯や目にも関心が向けられていった。特に「おんばこ」と呼ばれる獅子頭のたてがみに関心をもったが、どのように作ればいいのか分からない。そこで保育者が地域のおんばこ作りの様子をビデオで撮影し、子どもたちに見せると、本物の作り方と同じようにおんばこを縫いつけた。8月、製作した獅子をかぶって園内での遊びが始まった。地域の方から「本物の獅子舞は、獅子に頭を噛んでもらうことで健康でいられる」と聞いた。しかし製作した獅子には歯がなかった。そこで女児数名がペットボトルのキャップと色紙で金色の歯を作る。しかし取りつける場所が細く、不安定になった。そこでしっかり貼り

つけると、歯が埋もれて見えなくなってしまうという問題が生じた。しばらく歯の製作は断念したかのように見えたが、ある時K児が歯をつける場所を工夫して貼り付けることができた。秋になり、獅子が子どものイメージに近づいてきたことで、本物の獅子舞のように町を練り歩きたいとの声が上がった。町に出ることを想定した時に、別の子が「本物の獅子舞は、太鼓や鐘と共に町を練り歩く」と言い出した。ここから獅子とともに、太鼓作りや舞をイメージした踊りの考案も始まった。11月初旬、地域の文化祭で子どもたちの獅子作りの取組みを紹介し、音楽付きの踊りを披露することになった。地域の人々に自分たちの活動を伝えたことで、子どもたちは町を練り歩く期待感を高めていった。月末には冬の訪れが早いこの地域の天候を見極めながら、いよいよ製作した獅子が太鼓と共に町に出た。本物の獅子が巡るように、お賽銭代わりの菓子振る舞いをしてくれる地域の人、健康でいられるように噛んでもらいたいと頭を差し出す人、魔除けになるようおんばこを取ろうとする人の姿もあった。子どもたちは町の人たちが自分たちと一緒に楽しんでくれたことに、大きな喜びを感じたようであった。町への巡回後は、獅子や太鼓をどうするかを話し合った。年が明け、小正月には園に本物の獅子がやって来た。子どもたちの獅子舞に対する熱はここで再び盛り上がり、自分たちの獅子を担いで園内を巡る遊びは卒園の日まで続いた。

【活動の背景】

出雲崎町の獅子舞は、江戸元禄年間から行われてきた正月の伝統行事である。毎年各町内の神社から若衆に担がれた威勢のいい獅子が、太鼓や笛、ほら貝の音色に合わせて家々を回り、新しい年が無病息災であることを願う。子どもたちにとって獅子舞は迫力があり、「ワクワクするけど怖い」存在である。そのような中、馴染みのあるこの獅子に目を止める子どもがいた。

【考察】

この活動は保育者からの一方的な投げかけでなく、一人の子どもの興味、関心から発せられ



た言葉から始まった遊びである。出雲崎こども園では子どもたちがすぐに活動に取組めるよう、日頃から素材や資材を常備しており、自分の気持ちを自由に発言しながら遊べる環境作りを行っている。5歳児は毎日1回、クラスの皆で遊びの進捗状況や新しい発見、面白かったことを発表する時間を設けている。「自分の話を先生や友だちが聞いてくれる」ことを日々体験しながら成長する。

保育者は子どもたちの活動をドキュメンテーションにまとめ、いつでも誰でも手に取れるようにしていた。さらに地域一帯が保育の場であるという視点で活動を捉え、地域との連携で遊びを支えてきた。こうした保育を行うと同時に、子どもたちに無理をさせていないかと振り返り、日々いくつも生じる遊びが十分に展開できた場合は、タイミングを計って切り上げる判断も行っている。子どもたちが安心して主体的に遊べる場所を園が提供し、保育者が子ども一人ひとりの思いを汲み取りながら、ダイナミックな活動を援助する姿勢と、綿密な地域連携が図られている。こうして子どもたちなりの獅子舞遊びが、年間を通した活動につながっていったと思われる。

3.中央区立京橋朝海幼稚園 蚕の飼育から (織壁)

年少～年長 6月

ある日園に蚕が来て、数ある飼育物の仲間入りをした。園で子どもたちは前年度も蚕と触れ合った経験があ



り、蚕との再会を喜んだ。蚕は「お蚕さん」と呼ばれ、子どもたちに親しまれていた。特にA児は強く興味を示した。普段から「研究する」と言っような飼育物の観察を楽しんでいる。蚕が到着した数日後、A児が蚕の絵を描いた。白画用紙の中心に体全体が描かれ、尖った針のような形状を細い黄色いペンでお尻の辺りに描いた。友だちがそこに興味を示し「何？」と尋ねると、A児は自分の言葉で説明した。その説明は、図鑑や電子機器等で情報を得たものではなさそうだった。友だちは「大発見じゃん！」と声をかけた。観察で口元に注目することは予想されるが、A児は誰も注

目しない部分を発見して表現した。日常的に観察を積み重ねているからこそ見つけることができた。A児は集団遊びには消極的な方である。しかしこの観察で発見を称賛され、自ら友だちに説明することで自己肯定感を高めていった。自信満々に物事を進めるタイプではないからこそ、観察の積み重ねが発揮された。担任がさらに蚕の様子がよく見えるように机を出して中央に置くと、周辺にいた子どもたちも虫眼鏡で観察し始めた。「何してるの？」と集まって来る友だちにA児は「お蚕さんの研究をしているんだよ」と言って、お尻に黄色の針があることを説明した。これによりA児の存在は友だちの中で確実に認められたのではないかと保育者たちは見ていた。徐々に観察や研究の面白さが広がり、子どもたちの関心が高まった。観察や研究に必要な道具や設備を連想し、蚕をスケッチしたいくつもの絵を紙芝居のようにしてモニターに見立て、参加する皆でさらに蚕についての生態を共有する姿が見られた。

【活動の背景】

中央区立京橋朝海幼稚園は東京都の中心に位置し、周辺には築地本願寺や歌舞伎座、全国的に有名な病院や老舗が軒を連ねている。古きと新しき街並みが共存し、活気ある場所である。長く守られてきた伝統や良き文化が根付く土地にあるこの園は、2園が統合して30年が経過し、現在教職員9名と50名程の子どもが通う。園の主な伝統文化に関する取組みについて、「国や地域の伝統文化を織り交ぜながら、幼稚園にいる子どもたちと園の文化を作っている」と園長は語る。近隣の波除神社の本祭りの年には運動会に神輿を担いだり、月見の供物を築地場外市場から取り寄せたりするなど、地域の財産を活かして恩恵にあずかる。園内では「すくすくポタジェ」という菜園も始め、銀座のビル屋上の養蜂場から蜜蜂が時折飛来することからイメージキャラクター「きょうばっち(京蜂)」の愛称も付けた。古きを残し新しきにつなげる思いは、保護者も同様であった。銀座でシルクを扱う店主で群馬県富岡市出身の保護者から、2019年に「園で蚕を飼ってみませんか」との声があがった。日本で大切にされてきた伝統文化が衰退することを憂い、都心の幼稚園で蚕を育てることに伝統文化を継承する意義を見出していた。江戸時代より養蚕が始まり、日本の輸出の主

力製品となった絹で生計を立てた過去や、養蚕の実態を身近に感じる良い機会としての提案である。園では不安もあったが、この提案に「ご縁を感じた」と園長は話す。こうして保護者の手も借りながら、「お蚕さん」がいる園児の生活が始まった。蚕は富岡市から取り寄せ、餌となる桑の葉も初年度に苗木を求め、保護者とともに園の敷地に植樹した。こうして園に蚕がやって来た。子どもたちはその蚕に愛着をもち、進んで世話をする姿がある。卵から孵化した幼虫が成虫になり繭玉を作る様子を観察し、繭玉から糸を手繰る経験もできた。担任らの保育記録からは、「3歳児が上の学年のお世話をする様子を見たり手伝ったりして触れるようになり、興味が湧いた」「毎朝桑の葉をあげる4歳児が繭を作り始めたことに気付いた」「5歳児では生態(青虫→蛹→蝶々、幼虫→繭→蚕蛾)の表現遊びをしたり、繭玉で指人形制作とともに生活に活用された過去や感謝を知ることができた」などの記載が見られた。保育者は蚕から得られる子どもたちの学びが途切れないように自ら生態や飼育について調べ、さらに保護者の協力を得ながら園の伝統文化の萌芽期を継続するように努めている。

活動の評価について園長は「かけがえのないもの」と表現し、「子どもは伝統文化の担い手であり、継承者である。幼児期からその意識をもてるように。私たちはいかに後世に伝えていくかという役目がある」と話した。保護者の声掛けに始まった蚕の活動は、伝統文化を継承するという価値観ももたらしている。

【考察】

今回の調査及びインタビューから、子どもや保護者、保育者が蚕の飼育に真剣に取り組む姿が明らかになった。「幼稚園で蚕を飼ってみよう」という思いを一つにし、養蚕という日本の伝統文化を廻り、試行錯誤をしながら蚕と一緒に園生活を送るという新しい文化が生まれている。特に保育者は子どもへの学びの提供に留まらず、自身も伝統文化の担い手であることを深く意識していた。養蚕業の営みを想いながら日本の伝統文化について考え、脈々と受け継がれてきた伝統文化を途絶えさせないという使命を感じる。伝統文化に触れる機会は我が身が文化的存在であり、関わる全ての人が伝統文化の担い手であることを意識させる。

こうした新たな文化を育み伝承していく試みも、非常に有意義と思われる。

4.よみたん自然学校 エイサーから (小倉)

年少～年中 9月

例年9月に2学期が始まると、子どもたちから「エイサーをやりたい」という声が上がります。エイサーで一般的に使われる曲を流すと、それぞれ太鼓を叩いて踊り出す。新型コロナウイルス感染症の影響で青年会の活動が制限された期間は、子どもたちがエイサーをする機会も減ったが、それ以前は毎年のように繰り広げられる光景だった。



特にエイサーを好きな子が多い年は、毎日のようにエイサーをしていた。最初は曲に合わせて太鼓を叩くだけだったが、そのうち自宅からエイサー用の衣装を着てくる子もいた。地元の青年会で活動したことがある保育者がいたので、頭につける布は園のあり合わせで利用した。旗頭をやりたいという子もいて、これもあり合わせの竹の棒に布をくりつけて利用した。人数が多くて1人1つの太鼓が足りない時は、備品として買い足したこともあった。そのうち、子どもたちからお披露目をしたいという声上がり、見たいという子どもたちを集めて1曲演舞する会を自ら開催することもあった。

【活動の背景】

よみたん自然学校の3年保育は「幼児の学校」と称し、認可外保育施設として独自の保育理念で活動しており、領域「環境」のねらい及び内容(6)は意識されていない。活動は子どもたち自身で決定することを重視しており、毎朝「朝の集まり」を行い子どもたちの「今日やりたいこと」を聞いている。保育時間にはそれぞれが発表した「今日やりたいこと」を実現するように、保育者がサポートをする。

沖縄県は琉球国時代に文化を発展させ、現在まで多くの文化が継承されている。その中でも、読谷村は文化が色濃く残っており伝統芸能として継承されているため、園で地域の文化・伝統に触れることを意識するよりも、園児の保護者には地域の自治会の子ども会に加入して、文化・伝統に触れることを勧めている。村は文化で村おこしをしてきた歴史があり、読谷村公民館連絡協議会に加盟している24の自治会を中心に、地域の伝統芸能が盛んに行われている。旧暦の7月13日に仏壇のある家庭で「ニライカナイ(天国)」から先祖を迎え、7月15日の夜に見送る。その際ニライカナイに帰れず、地域を彷徨っている霊を祓うために行われているのがエイサーである(住宅地の道路を練り歩くため、道ジュネーと呼ばれている)。エイサーは各自治会の青年会(16歳から25歳)が行なうものであり、沖縄本島の中部(特に沖縄市)において盛んに行われている。音楽に合わせて太鼓を叩いて演舞するパートと手踊りを踊るパートに分かれ、太鼓は大太鼓、締め太鼓があり、パーランカー(手持ちの片張りの太鼓)を使う青年会もある。音楽は、地謡(じかた)による三線(さんしん)の生演奏である。最近では道ジュネー以外にもエイサー祭りやエイサー大会が各地で開かれるため、子どもたちは7月から9月にかけてエイサーを見る機会が多くなっている。

【考察】

幼稚園・保育所において文化や伝統に親しむ活動を行うためには、次の3つの要素が必要であると考えられる。①文化や伝統に触れる機会、②文化や伝統に親しむための道具、③活動を促進することのできる保育者。以下、それぞれについて考察する。

① 文化や伝統に触れる機会

よみたん自然学校では、基本的に子ども自身で活動を決定することを重視しており、この活動も子どもたちからやりたいという声が上がると始まっている。しかしそれは、子どもたちが保育時間以外に地域で伝統的に行われているエイサーという文化に触れていることがきっかけとなっている。そのため、地域の文化や伝統に触れる機会は何らかの形で必要である。

② 文化や伝統に親しむための道具

園にあらかじめ置いてあった太鼓、園児が家か

ら持参した服装、あり合わせのもので作った道具など、文化や伝統を楽しむためにはそれなりの道具が必要である。ただし全て地域で行われているものと同じものを揃える必要はなく、あり合わせのものを使いながら子どもたち自身で想像力を発揮して行うことも可能である。

③ 活動を促進することのできる保育者

実際に青年会でエイサーの活動をしたことがある保育者がいたことで、必要な道具や服装をあり合わせのもので作る事ができた。知識としてエイサーのことを知っているだけでなく、それを活かして活動を推進できる保育者の存在が、活動を継続・発展させる上で重要な要素となっていたと考えられる。

4. 総合考察 (請川)

今回聞き取りを行った4園のうち、3園がそれぞれの地域で行われる祭りから広がっていった活動であった。もう1園の中央区立京橋朝海幼稚園では養蚕を取り上げている。こちらの事例については後ほど考察をすることとし、まずは3園の祭りの事例について考察をしていくこととする。

宮城、新潟、沖縄と地域が大きく異なる3つの園であったが、今回の3つの事例に共通した点がある。それは園全体の活動として地元の祭りを取り入れたというのではなく、一部の子どもの興味・関心からスタートした活動であったということだ。「幼児の自発的な活動としての遊び」¹⁷⁾を重視する幼児教育において、幼児の活動は大人から一方的に与えられるものではなく、幼児の自発的な活動であるからこそ、そこに大きな価値があると考えるところに重要なポイントがある。

今回、研究テーマのキーワードとして取り上げられている「文化や伝統」を園での実践に取り入れようとすると、つい大人の側が幼児に指導をするという形になってしまいがちだ。それは、そのようにしない限り、幼児は地域の文化や伝統に気づかないと考えるからであろう。しかし、今回の事例を見て分かる通り、幼児は家庭や地域における経験の中で文化や伝統に触れており、それを園での遊びに再現しようと楽しみながら活動を展開している。重要なのは、そういった姿を保育者がしっかりと受け止めることができているかどうかであり、そのことが遊び自体の発展に大きな影響を及ぼしている。その遊び

が周囲の子に広がりを見せたり、一定程度の時間をかけながらより深まり発展していくのか。それとも、短い時間だけの一瞬の盛り上がりで終わってしまうのか。これらは、幼児の遊びを支える保育者の援助がないと難しいように感じる。様々な偶然が重ならなければ、幼児だけで遊びを発展させていくことは困難だろう。

向山こども園の事例では、すずめ踊りを楽しんでいる数名の年長児のために、保育者は「楽器やメイクのための顔ペン、衣装を作るための古着、扇形に切った画用紙など」を用意している。また、よみたん自然学校のエイサーでは、エイサーの衣装として活用する布を用意したり、太鼓を買い足したりしている。こういった物的な環境の援助を行うためにも、子どもたちの興味を把握することはとても重要である。

最初はたった一人の興味から始まった遊びが、最終的に複数の人数での遊びに発展する場合もある。出雲崎こども園の獅子づくりはそういった例であった。最初は一人の獅子舞好きな男児から始まった遊びだったが、その一人の興味に賛同する子たちが次第に集まり、獅子舞をより本格的に作っていく活動へと変化していく。このように子どもたちが集まってくる過程に至る前に、保育者は集まりの場面で獅子舞への取組みを紹介したり、作ったものを皆に見せたりするなどの援助をしていたようである。獅子づくりの中で、「おんぼこ」をどう獅子頭につけたらよいか困っている子たちのために、保育者が「地域のおんぼこ作りの様子をビデオで撮影し」子どもたちに見せるという援助も行っている。

以上の3つの実践例は、保育者がさせたいことを幼児へ一方的に与えていくのではなく、地域の文化や伝統に刺激を受けた幼児の遊びを、保育者がどう支えていったらよいかという援助によって成立したものであった。

一方、文化や伝統に触れること自体を園で提供するということも重要な視点である。地域に根付いた祭りであれば、家庭や地域での経験に委ねることもできる。しかし、これから新しい文化を形成していくという段階では、幼児が家庭や地域での生活においてその文化に触れることは難しい。もし家庭や地域にのみ委ねていたとしたら、その地域の文化・伝統が衰退していくとともに幼児がそれらに触れる機会もどんどん失われていくだろう。園として、地

域の文化・伝統が園生活を豊かにする意味で非常に重要な資源であるということを伝えていく必要がある。中央区立京橋朝海幼稚園の事例はまさにそういったものであった。

京橋朝海幼稚園は東京都中央区という都会の中心にある園だが、本稿掲載の事例はそこで養蚕という文化を再現しようという試みであった。元々この地域に養蚕の文化はないのだが、地域に住む保護者の故郷である群馬県富岡市の産業、そして日本に古来から伝わる文化としての養蚕を園内で再興するというものである。今後この活動が、園から地域にまで広がっていくことはなかなか難しいだろうが、全国的に失われつつある養蚕の文化を園が担っているという部分では非常に興味深い活動である。

幼児は地域の文化や伝統から影響を受けるだけでなく、実は文化や伝統の担い手であるという側面も大きい。少子化傾向になり久しいが、近年は子どもの数が減ってきた影響で地域の祭りが成り立たないという話を聞く。かつては様々な地域で行われていた子ども神輿も、担ぎ手がいなくなることで祭り自体が存続できないということが実際に起こっている。そのような中、東広島市にある認定こども園さざなみの森では、かつて地域で行われていた亥の子祭りを、園内の活動として行っている。亥の子祭りを担っていた子どもたちの数が少なくなったため地域で祭りが開催できなくなり、その事情を知った前・園長が、地域で保管されていた祭具を借りてきて、それを使って園内で亥の子祭りを行っている。今は園内だけの祭りとして留まっているのだ。この祭りが園から外へ出て、地域の人たちと共に行うことになれば、地域の祭りを園が中心となって復活させたという大変興味深い事例になるだろう。このことは稿を改めて書くことにしたい。

引用文献

- 1) 文部科学省：幼稚園教育要領，2017年告示
- 2) 厚生労働省：保育所保育指針，2017年告示
- 3) 内閣府：幼保連携型認定こども園教育・保育要領，2017年告示
- 4) 山崎宣次，奥谷佳子，吉田真弓：幼稚園教育要領等の「内容」に関する保育者の意識，山梨県立大学人間福祉学部紀要，15，59-67 (2020)
- 5) 広辞苑無料検索 大辞林【文化】
<https://sakuraaris.org/dict/%E5%A4%A7%E8%BE>

- <https://sakuraparis.org/dict/%E5%A4%A7%E8%BE%E6%9E%97/prefix/%E4%BC%9D%E7%B5%B1> (2022.7.12)
- 6) 文部科学省：幼稚園教育要領解説，フレーベル館，211 (2018)
- 7) 厚生労働省：保育所保育指針解説，フレーベル館，246 (2018)
- 8) 内閣府：幼保連携型認定こども園教育・保育要領解説，フレーベル館，273 (2018)
- 9) 同掲5) 【伝統】
- 10) 田口鉄久：地域連携保育の教育的意義と課題，鈴鹿大学短期大学部紀要，37，115-124 (2017)
- 11) 松崎行代：地域文化を支える幼稚園・保育園の役割 —飯田市の人形劇フェスタを事例に—，京都女子大学発達教育学部紀要，12，115-125 (2016)
- 12) 恒岡宗司：幼稚園における「年中行事」の取扱いに関する一考察 —奈良県国公立幼稚園・こども園の実態調査から—，奈良学園大学奈良文化女子短期大学部紀要，46，33-53 (2015)
- 13) 安藤雅之，大矢隆二：グローバル対応力を育成する「伝統・文化」教育の充実に関する考察：東京都の取り組みとカンボジアの学校教育を視座として，常葉大学教育学部紀要，36，117-126 (2016)
- 14) 同掲6) 129
- 15) 佐久本邦華：沖縄県内保育所・保育園における地域に根差した造形教育の取り組み：身近な植物を用いた造形や染め織りの実践に関しての調査，沖縄キリスト教短期大学紀要，45，63-77 (2017)
- 16) 川崎勝彦，今津孝次郎：行事と地域環境の視点による幼稚園教育の再検討と保育者養成の諸課題，東邦学誌紀要論文，47，1，77-89 (2018)
- 17) 同掲6) 26